

羽村市史編さんだより

平成28年4月

第5号

伸びゆくはむら

特集

中世 三田氏と羽村の関係を探る

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとんべえ」

2



N e w s

第4回羽村市史編さん委員会を開催

2月8日（月）に、市役所で、第4回羽村市史編さん委員会を行いました。会議では、平成27年度の事業の実績や平成28年度の事業計画について話し合いました。

平成28年度も引き続き調査・研究活動を継続し、平成29年度の、資料編2冊（中世編（仮）、近現代写真図録編（仮））の発行に向けた準備を進めていきます。

会議録は、市史編さん室および市公式サイトで公開しています。ぜひ、ご覧ください。



▲第4回羽村市史編さん委員会の様子

第2回地域別聞き取り調査を行いました

2月1日（月）から3日（水）に、川崎・上水通り・本町・東・清流・五ノ神・小作地区の習俗や伝承について、聞き取り調査を行いました。おおむね70歳以上で、この地区で生まれ育った方や結婚してこの地区に住むようになった方など、123人の方に参加していただきました。

昔の写真や資料を持参してくださった方も多く、当時の様子を振り返りながらお話を伺うことができました。

現在は、各分野について、さらに詳しく調べるため、個別に調査を行っています。



▲聞き取り調査の様子



表紙の写真 からかいやま 辛垣山遠望【青梅市 奥多摩橋から撮影】

左奥に見える辛垣山山頂付近に、三田氏最後の砦となった辛垣城がありました。現在も曲輪の痕跡が残り、青梅市の史跡に指定されています。

北条氏照に攻められた三田弾正は、勝沼城から辛垣城へ移り抗戦しますが、防戦むなしく落城します。

右手前のお寺は、三田氏の菩提寺である海禅寺です。

● 中世とは

中世とは、歴史の時代区分で古代と近世の間を示す用語です。日本史の中で中世をどのように考えるかは諸説ありますが、荘園・公領制という土地制度の成立、存続を視点として、古代から中世への転換は11～12世紀頃、近世への転換は、関東地方の場合、後北条氏が滅亡した16世紀末と考えられています。つまり、今から900年ほど前から420年ほど前の約480年間の事です。時代の移り変わる様相については、今後の調査研究で明らかにしていきます。

● 羽村市の中世

では、中世の羽村市域はどのような状況だったのでしょうか。

残念なことに、鎌倉時代の生活の様子を物語る直接的な資料は発見されていません。ただ、多摩川畔、羽加美に鎮座する阿蘇神社に保存されている「木彫狛犬」は、鎌倉時代の初めかそれよりももう少し古い時代の製作とされています。

さらに、阿蘇神社境内からは、室町時代に相当する14世紀中ごろから後半期に製作された本殿の瓦が多数発見されています。また、社殿を造営した際に記録された「棟札」と呼ばれる木札も現存しており、最古のものは「天文五年（1536）」の年号が書かれています。

このころになると、一峰院や禅福寺が創建されたとの記録が残され始めます。一峰院の本尊十一面観音像は室町時代の製作とされています。

阿蘇神社の棟札には、「三田定重」、一峰院の縁起には「三田将定」の名前が見えます。

● 三田氏の支配

これらの資料に見える「三田氏」とは、どんな一族だったのでしょうか。

『青梅市史』などによると、三田氏は、現在の青梅市を中心として、奥多摩町や飯能市、羽村市あたりまでを勢力範囲とした武士集団でした。16世紀半ばごろの関東広範囲にわたる戦乱では関東管領上杉氏に属していましたが、関東一帯を後北条氏が勢力下に納めるとこれに与し、その後再び後北条氏と敵対します。最後は、永禄年間（1560年代）に北条氏照軍によって攻め滅ぼされています。

羽村市の中世の様子も、三田氏の行ったことからわかっていくことが多いのです。

● 三田氏の事業

三田氏は、社寺の造営に熱心だったといわれています。宗家はもとより、その一族もいくつもの社寺を造営し、その一つが阿蘇神社本殿の修理であり一峰院の創建でした。

三田氏が本拠とした青梅市域には、彼らが修理や寄進をした仏像や梵鐘なども残されており、三田氏に関する情報がそれらに記録されています。いわば「履歴書」ともいえるべき記録が書かれていることから、これらを調べることで、三田氏の行いがわかるのです。

いこいの里の裏手の土手際に、石塔類がひっそりと建てられています。その脇の説明板には「伝三田雅楽之助平将定等の墓」とあり、羽村市指定史跡に指定されています。羽村にも三田氏一族の痕跡が残されています。



◀ 伝三田雅楽之助平将定等の墓

● 市史編さんの調査

とはいっても、残された資料の数は青梅市域の社寺が圧倒的に多いので、市史編さん事業では、それらの資料に実際にあたって詳しく調べるため、各所蔵先にご協力をいただき、それぞれの資料を調査しています。さらに、後北条氏やその他の資料も調査を進めていきます。



◀ 調査の様子

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。

用語の解説

かずさそうぐん

上総層群…関東平野の地下に広がっている数百万年前の地層。羽村市内の多摩川西側の崖や千葉県房総半島では地上で観察できる。



第1部会 ～原始・古代・中世～

三田氏関連資料および地域資料の調査のため、市内の龍珠山一峰院において、三田氏の位牌（三田雅楽之助将定位牌）などの調査を行いました。

また、青梅市の成木山安楽寺、金剛山玉泉寺において、後北条氏関連史料の調査を行いました。これらは、三田氏滅亡後の様子をうかがい知ることができる資料です。

中世石造供養塔調査も引き続き行っており、全点完了まであと少しです。



▲青梅市・安楽寺での史料調査の様子



第2部会 ～近世～

引き続き、市内・市外の双方で近世期の羽村市に関する資料の収集・分析を行っています。

市内では、過去に調査された場所で新出資料の有無を確認し、新たに資料が発見された場合、その資料群の記録・データ化作業を進めています。『羽村町史』や他の自治体調査では確認されていなかった資料も多く発見されています。

市外では、さまざまな大学や図書館で羽村市に関する資料の検索・収集を行っています。

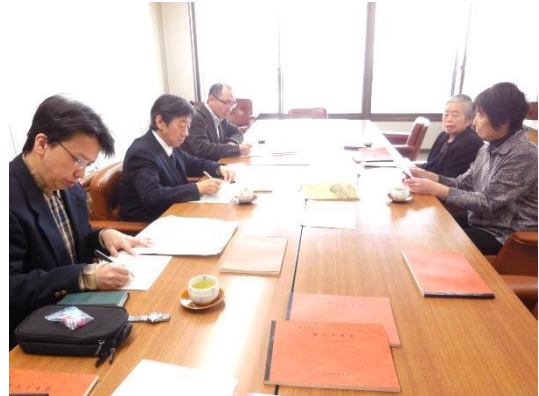


▲市史編さん室での史料整理の様子

第3部会 ～近代・現代～

引き続き近現代の羽村について記録されている資料の閲覧・情報整理を行っています。作業内容としては、郷土博物館収蔵資料の閲覧・新聞記事目録のデータベース作成・行政資料の閲覧・個人が保管する資料の整理・関係機関に保管されている資料の縦覧です。

このほかに旧羽村市婦人会への聞き取り調査を行い、発足の経緯や現在に至るまでのさまざまな活動の実情を伺いました。今後も、市内関係団体への聞き取り調査を継続していきます。



▲旧羽村市婦人会との懇談会の様子

第4部会 ～自然～

気候班は2月の気象観測で、通常の観測に加え早朝の観測も行いました。夜明け前の気温はぐっと下がり、多摩川の土手上に設置した風向風速の観測場所では足元から冷え込みました。今後は、四季を通して市内各所で行った気象観測結果の解析を進めていきます。

地形・地質班は房総半島を訪れ、上総層群の地質調査を行いました。

生態班は引き続き緑地および市街地に生息する生物の情報収集を進めています。



▲早朝の気象観測の様子

第5部会 ～民俗～

昨年8月の地域別聞き取り調査（奈賀・田ノ上・間坂・宮地・美原地区）に続き、2月1日（月）から3日（水）に、川崎・上水通り・本町・東・清流・五ノ神・小作地区の聞き取り調査を行いました。自宅で行った結婚式や葬式の話、各地域のお祭りや暮らしの様子などさまざまな話を伺うことができました。

また、2月3日（水）には個人宅で節分飾りの調査を行いました。他にも、個人宅所蔵の資料調査から、市内の信仰の様子の一部を知ることができました。



▲2月の聞き取り調査の様子

市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
1月	7日(木)	①② 一峰院資料調査
	13日(水)	① 中世石造供養塔調査
	15日(金)	羽村市史編さんだより 第4号発行
	27日(水)	④ 市内礫層調査 ⑤ 郷土博物館収蔵資料調査
2月	1日(月)～3日(水)	⑤ 地域別聞き取り調査(川崎・上水通り・本町・東・清流・五ノ神・小作地区)
	1日(月)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測
	2日(火)	④ 市内礫層調査
	3日(水)	⑤ 年中行事調査(川崎・美原)
	5日(金)	②③⑤ 個人宅(間坂)史料調査
	8日(月)	第4回羽村市史編さん委員会
	9日(火)	③ 郷土研究会会員との懇談

月	日	できごと
2月	12日(金)	④ 市内礫層調査
	22日(月)	⑤ 個別聞き取り調査
	24日(水)	⑤ 個別聞き取り調査
	25日(木)	⑤ 個別聞き取り調査
	26日(金)	⑤ 個人宅(小作)資料調査
	29日(月)	③ 旧婦人会会員との懇談
3月	2日(水)	⑤ 個別聞き取り調査
	3日(木)	① 中世史料調査(青梅市) ⑤ 個別聞き取り調査
	8日(火)	第8回羽村市史編さん本部会議
	10日(木)	⑤ 個別聞き取り調査
	15日(火)	④ 気温観測データ(定点)の回収
	18日(金)	④ 地質調査(千葉県)
	22日(火)	① 資料調査(奥多摩町)
	23日(水)	議会全員協議会への報告
	28日(月)	② 個人宅(五ノ神)史料調査

コラム

ちっとなべえ

サクラも葉桜に変わり、日差しが心地よい季節になりました。羽村ではサクラとチューリップが楽しめる「花と水のまつり」から始まり、町内会の花壇にも花が満ちていきます。新緑がまぶしく花にあふれたこの季節の散歩には、カメラが手放せません。

カメラといえば、現在、市役所の庁舎内に定点カメラを設置し、草花丘陵の静止画を撮影しています。「富士山が笠雲をかぶれば雨」というフレーズを聞いたことはありませんか。このように雲や風などの空模様や動物の行動から、狭い地域の天気を予測することを「観天望気」といいます。

羽村でも草花丘陵にかかる雲や空模様について、その事象を撮影し、天気との関係を調べています。解析はこれからですが、どんな画像が撮れていくのか楽しみです。結果は、羽村の身近な気候の解析に生かしていきます。

第5回 「うららかな春と空模様」

市史の編さんに携わり、羽村の自然はもちろん、人々の暮らしに触れる機会もぐんと増えました。普段は日々の作業に追われ、余裕をなくしがちですが、身近な事象や何気ない暮らしの一コマにちょっとでも目を向ける、そんな余裕を大切にしたいです。(S.K 記)



▲根がらみ前水田のチューリップ畑

※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。

羽村市史編さんだより

平成28年7月

第6号

伸びゆくはむら

特集

1960年代の羽村と

東京オリンピックピック

2



- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとなべえ」

News

むかしの写真募集！

昭和以前の羽村に関する写真はありますか？

広報はむら 7月1日号でお知らせしていますが、郷土博物館では、市史編さん事業にも活用させていただき昭和以前の写真を集めています。くらしの様子や風景、まちの移りかわりなど、どのようなものでも構いません。

古い写真をお持ちでしたら、ぜひ郷土博物館までお寄せください。お寄せいただいた写真は複写した後に返却します。

※今回の写真募集は、郷土博物館と市史編さん室が協力して行いますが、写真のお預かり、お問い合わせについては、郷土博物館までお願いします。

募集期間 平成 28 年 7 月 1 日～10 月 31 日

問合せ 羽村市郷土博物館

電話:042-558-2561

Eメール:s709000@city.hamura.tokyo.jp



▲昭和 48 年（1973） 完成間もない羽村駅東口



▲昭和 49 年（1974） 産業祭風景



▲昭和 40 年（1965） 都下一周駅伝競走大会



表紙の写真 1964 年東京オリンピック聖火リレー

写真（上）は、奥多摩街道（玉川上水第 3 水門付近）を走る聖火リレーのランナーです。雨の中、歴史的瞬間に立ち会おうと多くの住民が詰めかけています。

写真（下）は、羽村を抜けたランナーが、整列して待つ福生のランナーに聖火を引き継ぐ直前のシーンです。大役を果たした安堵感と、これからスタートする緊張感が交錯しているようです。

それぞれの地点の現在の様子と比べてみました。50 年という時はどう流れたのでしょうか。

● 東京オリンピックとその時代

1960年代は高度経済成長期における都市開発の潮流のなかで羽村が大きく変貌していく時期でした。なかでも首都圏整備法に基づく昭和37年(1962)の市街地開発区域の指定は、職住近接の街づくりの出発点となり、現在の羽村を形成する基盤となりました。さらに昭和39年(1964)の東京オリンピック開催が決定すると、首都圏整備事業費にオリンピック関連事業予算が計上されたため、事業に急速な進展が見られました。

● 1964年東京オリンピックと羽村

昭和39年(1964)東京オリンピック開催に当って、羽村もまた他の市町村と同様に様々な取り組みを行い、気運醸成を図りました。

開催準備として東京都は「一千万人の手で東京をきれいに」をスローガンにして首都圏美化運動を展開しており、羽村においても開催1か月前の9月6日午前8時より「一斉に大掃除を行いますから皆さん一人残らず参加して下さい。」という声掛けをしています。このような地域を挙げての清掃活動は点検カードをチェックしながら指導を行うという徹底したものであったようです。

さらに聖火リレーが開会式2日前の10月8日に羽村を通過することになり、羽村から聖火ランナーとして正走者1人、副走者2人、従走者20人が選抜されました。10月8日の天候は雨でしたが、聖火は羽村の聖火ランナーから福生の聖火ランナーへと無事引き継がれていきました。



▲玉川神社前で聖火の到着を待つ聖火ランナー

● 都市化する羽村

それでは東京オリンピックが開催された昭和39年(1964)前後の羽村はどのような地域だったのでしょうか。

当時は冒頭でも述べたように首都圏整備法に基づく区画整理事業が開始され、都市開発が推進されていた時期でした。そのうえ区画整理事業の前段階において工場誘致を図った結果、昭和36年(1961)日野自動車の羽村進出が決定しました。このような工場誘致は税収の呼び水になっただけでなく、雇用の増大を招き、他地域から羽村へ移住する人びとが増加する傾向にありました。



▲操業間もない日野自動車

さらにこのような変化に対応するために昭和37年(1962)に上水道施設、昭和38年(1963)にし尿処理場が設立されることにより地域のインフラが整備されただけでなく、住宅エリアの開発が目指された結果、職住近接の地域へと変貌を遂げていきました。



▲神明台区画整理 都市計画街路

● 市史編さんの調査

1960年代の羽村の歩みを辿れば、現在とは異なる地域の様相が現れます。昭和39年(1964)の東京オリンピックがもたらした、1960年代における急激な都市開発と急成長は羽村にも様々な角度から影響を及ぼし、その遺産は現在に継承されています。今回の市史編さん事業では昭和49年(1974)に刊行された『羽村町史』ではあまり触れられることのなかった戦後の歩みを充実させます。その際に市民の皆様が所蔵されている写真も参考にさせて頂く予定です。

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。



用語の解説

^{ほんじ}梵字…サンスクリット語を表記するための文字。日本では、一文字で神仏等を表す。

^{さんしつ}蚕室…蚕の飼育専用の建物。市内には数棟残っているが、蚕の飼育は行っていない。

^{ぜんわん}膳椀…食器類のこと。昔は、冠婚葬祭などの人寄せの際に使用するものが、地域の共有物として一か所に保管されていた。



第1部会 ～原始・古代・中世～

中世班では、妙徳山禅福寺で中世石造供養塔調査を行いました。境内に並ぶ五輪塔は、中世以外にも近世期のもも確認されました。五輪塔は、積まれた石の下から「地・水・火・風・空」を表しており、しばしば漢字や梵字でその文字が刻印されます。表面が風化し読みづらくはなっていますが、拓本を採ることでよりはっきりと文字を見ることができました。

縄文班では、過去の発掘調査資料を整理しています。山根坂上遺跡から出土した縄文土器の破片や石器などの調査で得られた情報は20万件以上あり、当時の生活の様子を明らかにするため分析を進めています。



▲禅福寺五輪塔調査の様子



第2部会 ～近世～

近世期の羽村・五ノ神村・川崎村に残されている古文書の調査を行っています。当時の村政を担っていた家々や寺社・商家など、それぞれの村の記録を対象に順次調査を進めています。

右の写真は「大福帳」と呼ばれる史料で、商売の様々な記録を控えておいたものです。

この史料では福生村などの隣接していた村だけでなく八王子（文中では「八王寺」）など少し離れた場所とも取引をしていたことを確認することが出来ます。

このように史料から読み取れる情報を余すことなく収集し、整理作業を進めています。



▲古文書に記された商売の記録



第3部会 ～近代・現代～

資料編「近現代写真図録編（仮）」の刊行に向けて、市の刊行物に掲載された写真の複写を行っています。並行して、郷土博物館所蔵の写真整理にも着手しました。今後は市民の皆様が保管している写真も参考にさせて頂く予定です。

また、引き続き資料の閲覧・情報整理を行っています。作業内容としては、郷土博物館収蔵資料や行政資料の閲覧、新聞記事目録データベースの作成、個人が保管する資料の整理、関係機関に保管されている資料を確認するなどして、近現代の羽村に関する調査を進めていきます。



▲写真整理作業の様子



第4部会 ～自然～

地形地質班は、立川断層調査と礫層調査のため近隣市へ出かけました。青梅市内での調査では、立川断層の活動により形成された斜面を確認しました。

気候班は、今年度も市内全域の気温の移動観測と風向・風速の定点観測を行っています。5月には春の観測を行いました。今年も計4回、季節ごとに実施する予定です。

生態班は5月に市内全域にて一斉に鳥類調査を、6月には市内緑地にて植生調査を行いました。鳥類調査ではツミ（タカ科）、アオサギ（サギ科）の巣をそれぞれ市内で確認しています。



▲青梅市内の調査地点



第5部会 ～民俗～

市内に残る蚕室の調査を行い、養蚕が行われた当時の、建物の構造や作業内容を記録しました。

また、小作本町会館に保管されている膳椀の調査を行いました。どのような種類のお膳やお椀が残っているかを確認し、それが生活の中でどのように使用されてきたのか、現在調査を進めています。

引き続き、人々の暮らしに関する聞き取り調査も進めています。



▲膳椀調査の様子

市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
4月	1日(金)	④ 市内礫層調査
	12日(火)	⑤ 聞き取り調査(個人宅)
	15日(金)	羽村市史編さんだより 第5号発行
	20日(水)	④ 断層調査(青梅市・瑞穂町)
	23日(土)	① 中世石造供養塔調査(禅福寺)
	25日(月)	⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
5月	9日(月)	⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
	10日(火)	⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
	11日(水)	④ 断層調査(青梅市・飯能市) ⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
	15日(日)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測 ⑤ 聞き取り調査(個人宅)

月	日	できごと
5月	19日(木)	④ 礫層調査(あきる野市)
	22日(日)	④ 市内鳥類調査
	23日(月)	①② 市内石造物調査
	24日(火)	② 個人宅(五ノ神)史料調査 ※以後定期的に実施
	29日(日)	③ 郷土博物館写真資料調査
	30日(月)	⑤ 小作本町会館保管の膳椀調査
	31日(火)	⑤ 小作本町会館保管の膳椀調査
6月	12日(日)	④ 市内植生調査
	14日(火)	① 中世石造供養塔調査
	15日(水)	④ 断層調査(国立市)
	24日(金)	④ 気温観測データ(定点)の回収

コラム

ちっとなべえ

江戸時代の名主と呼ばれる人達の家には、年貢の支払や領主からの命令の写しなど様々な史料が残されています。それらの史料からは名主が村において重要な役割を果たしていたことがわかります。

村の運営に携わっていた名主は、どのような人物だったのでしょうか。『皇国地誌』という明治期に作成された資料には、江戸時代に羽村の名主役を勤めていた人物について以下の様に記されています。

(本文)「…撃剣ノ業ヲ天然理心流二祖近藤三助ニ学ヒ、(中略)和歌ヲ好海野遊翁ニ学ヒ、一世ノ詠多シ。マタ囲碁ヲ嗜ミ、初老ノ頃ヨリ頗ル妙手…」

(内容)「…剣術を天然理心流二代目近藤三助に学び、(中略)和歌を好み海野遊翁に師事し、優れた詩歌が多い。また囲碁を嗜み、初老の頃から非常に強く…」

第6回 「名主は村の“文化人”？」

上記から名主の職務を遂行しながら、剣術を学び、和歌を詠み囲碁を楽しんでいた人物であったことがわかります。この人物の家には現在も江戸時代に作成された和歌に関する蔵書が残されています(写真)。

江戸時代の村に住んでいた人々は、専ら農業など家業に従事していたイメージがあると思います。しかし家業に従事しながら、一方では剣術の修行や和歌・囲碁など多様な活動を行っていたことがうかがえます。(S.Y 記)



※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。